いしかわの遺跡

No.78
2025.3.17

豊かな水に恵まれた人々の暮らしに迫る！

井戸に捨てられた土器・木製品

丸太をくり抜いて作られた井戸枠

丸木舟を再利用して作られた井戸枠

能美市中ノ江遺跡の令和６年度調査で、弥生時代後期～古墳時代前期の井戸を複数確認しました。

井戸枠の材料は様々で、丸木舟を再利用したものや、丸太の中心をくりぬいたものもありました。中でも、縦板と丸太くり抜きの井戸枠を組み合わせて円形に配置したものは類例が少なく、注目されます。

井戸からは土器や木製品などが出土しており、祭祀に使われた後に廃棄されたものと考えられます。

調査中も井戸の底からは水が湧き続けていました。調査は大変苦労しましたが、当時の人々がこうした豊富な水の恩恵を受けながら生活していた様子を知ることができました。

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター
Ishikawa Archaeological Foundation
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
E-mail:daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

いしかわの遺跡

R6 発掘調査

中ノ江遺跡［能美市］

中ノ江遺跡は、梯川の支流である八丁川の右岸に位置する弥生時代～中世の遺跡です。北陸新幹線敦賀延伸工事の際に行われた発掘調査では、弥生時代後期～中世の集落が確認されています。今回の調査は地方道改築事業に伴うもので、今年度からはじまりました。

今年度の調査では、主に弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡を確認しました。調査区では、平地式建物・布掘り建物・掘立柱建物など、様々な形の建物跡が確認され、当時の生活の様子を窺わせます。平地式建物の周りには溝（周溝）が巡らされており、溝の直径が 18 mにも及ぶ大型のものもありました。また、調査区の西側では、二重の溝が確認されました。この溝の西側では遺構があまりみられなくなることから、弥生時代の集落の境界を示すものと考えられます。

このほか、弥生時代中期の土坑もみつかり、性格は不明ですが、直径 4 mを超えるような大型のものもありました。この時期の土坑からは石鋸（石を分割するための道具）や製作途中の管玉も出土しており、集落の中で玉作りが行われていたことがわかりました。

また、奈良・平安時代の川跡も確認され、須恵器や土師器が多く出土しました。中には「万昌」「昌」「益」などの文字が記された墨書土器も含まれていました。さらに、石帯（巡方）と呼ばれる、古代の役人が身につける腰帯の飾りも出土したことから、今回の調査地の近くに文字の読み書きができる識字層（官人や僧侶）がおり、当時の役所に関わりのある人物であった可能性もあります。

調査は次年度以降も続く予定です。これまでの調査の成果と合わせて、低地に所在する弥生時代後期～古墳時代前期の集落の様相がより一層明らかになるものと期待されます。

調査地遠景（北西から）

周溝をもつ平地式建物（南西から）

4 mを超える大型土坑（南から）

出土した墨書土器（奈良・平安時代）

R６古代体験

古代体験ミニ講座『弥生の玉づくり』

11 月 17 日（日）に、ミニ講座『弥生の玉づくり』を開催しました。大型のまが玉と管玉を作り、首飾りに仕上げます。県内出土の本物のまが玉や管玉から、当時の人々の繊細なワザを見出し、そのワザに近づけるように当時の方法で製作します。滑石の塊から「施溝分割技法」でまが玉１つと管玉２つの素材を作り、砥石（天然の石）で削って仕上げます。原石の節理によって欠けてしまうこともありましたが、何とか素材を取り出し、砥石で削り、穴をあけ古代のワザを習得していました。

世界に一つの、自分だけの首飾りを作り上げることができ、6 名の参加者はみなさん満足げでした。

協力してワザを習得

本物を見てワザを確認

体験でワザを試す

完成

R６古代体験

古代体験学習講座『鳥形はにわづくり』

12 月 15 日（日）に、古代体験学習講座「鳥形はにわづくり」を開催しました。

今回の講座には 30 人が参加し、形象埴輪である鶏をモデルにした「鳥形はにわ」を製作しました。

講座当日は、古墳時代とはにわについて学んだ後、午前中に実際に粘土を使って器台と胴体をつくり、午後から首や羽などのパーツを取り付けて装飾を施しました。参加者の中には、夏休みの人物はにわづくりの経験者もいましたが、胴体の整形や首や尾羽のパーツをバランス良く取り付ける作業に苦戦する様子も見られました。しかし、どの参加者も一生懸命に粘土を積み上げ、素敵な作品を仕上げていました。

体験者の作品は、令和７年１月下旬から２月中旬にかけて電気窯で焼成し、3 月１日（土）から本館ホールにて返却を行いました。

胴体をつくる様子

頭部をつくる様子

仕上げ作業の様子

R6 古代体験

『木簡（もっかん）年賀状づくり』

11 月 23 日（土・祝）から 12 月 8 日（日）にかけて「木簡年賀状づくり」を行いました。

木簡とは、文字などを記した木の札のことで、古代には、役所の連絡文書や品物の荷札などに使われていました。出土品では、７世紀頃には使われていたことがわかっています。

県内では、金沢市畝田・寺中遺跡や津幡町加茂遺跡などで出土しています。書いた字を削り取って何回も使用出来ることは、当時は紙が貴重だったので、便利で経済的だったのかもしれません。

体験では、はがきサイズの木の板に古代の文房具である陶硯（とうけん）と筆を使い、特製の木簡年賀状を作りました。また書き直す際は、古代と同じ方法で、小刀でその文字を削り取りました。

体験者は、巧みに今年の干支である巳のイラストを描いたりしながら楽しんでいました。切手を貼れば実際に送れるため、子ども達が張り切って書いていたのが印象的でした。

津幡町加茂遺跡　出土木簡

製作風景

記念撮影

R6 古代体験

『古代の独楽（こま）づくり』

新春、令和７年１月４日（土）から１月 19 日（日）まで、古代の独楽づくり体験を実施しました。

ここで作製する独楽は、約１３００年前に奈良県にあった藤原京からの出土品を参考にしたものです。木を削り円錐形の形をした独楽を作り、布を編んで棒につけて作った鞭（むち）を使い、叩（たた）きながら回転させ「叩き独楽」または「鞭独楽」と呼ばれています。当時は、独楽を「胡魔」に例えて、鞭を打つことで鬼を払う“まじない”に使われていたと言われています。また、朝鮮半島にあった高麗という国を経て伝わったために「こま」と呼ばれるようになったとの説もあります。

製作風景

体験者は、コマの下部分をサンドペーパーで削って回りやすい角度に整えた後、ムチの棒を握りやすい形に削り、布を三つ編みにして棒に結びます。完成した後は、工房の空きスペースを利用して、実際に独楽を叩きながら楽しく回す姿が散見され、職員が微笑ましく見守っていました。

羽咋市　大町ダイジングウ遺跡
出土独楽

独楽回し体験

R6 古代体験

『真冬のはにわづくり』

令和 6 年度は、毎年人気の古代体験を 2 つ、来館者の少ない冬季の期間限定講座として実施しました。その内の一つが、令和 7 年 1 月 14 日（火）から 1 月 24 日（金）の期間で開催した、「真冬のはにわづくり」です。この講座は、古墳時代の文化を知るため、小松市の重要文化財矢田野エジリ古墳から出土した埴輪の製作技法を参考にして人物はにわを製作するもので、平日限定の開催にもかかわらず、17 人が参加しました。

今回の体験は 1 日かけてのはにわ製作となっており、体験時間が長いため、できるだけ出土品に近い作品を目指しました。そのため、夏の「人物はにわづくり」経験者でも、全体のバランスや頭部の形状、はにわの表情づくりなどに苦労する様子も見られました。しかし、時間をかけてじっくりと製作にとり組み、最終的には素敵な「はにわ」に仕上げていました。

粘土紐をつくる様子

器台をつくる様子

できあがった作品

R6 古代体験

『真冬のガラス玉づくり』

令和 7 年 2 月 3 日（月）から 2 月 14 日（金）の期間で、「真冬のガラス玉づくり」を開催しました。

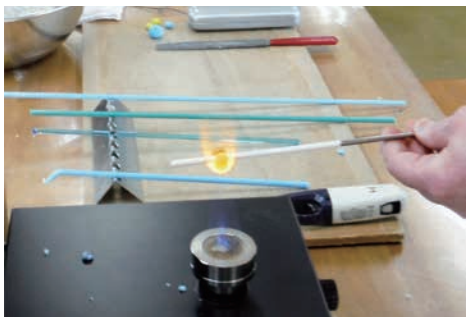
この古代体験は、1 月の「真冬のはにわづくり」と同様、冬季の期間限定講座として開催したものです。

平日限定で行ったこの体験には、合計 36 人が参加し、ガラスの歴史を学び、実際に「巻き付け技法」を用いたガラス玉づくりを行いました。

体験では、参加者が赤色、青色、黄色、緑色などから、好きな色のガラスを選び、ガラス玉の製作を行いました。

バーナーを使ってガラスを溶かし、鉄の棒に巻き取って玉をつくる作業は、ガラスの溶け具合や巻き取りの加減など、同時に調整することが多く、スムーズにいかない様子も見られましたが、約 1 時間の体験の中で試行錯誤しながら、皆さん綺麗なガラス玉をつくっていました。

ガラスを溶かす様子



ガラス玉を成形する様子

R６情報発信

令和６年度ホール展

当センターの玄関ホールを会場として、第１回は、北陸新幹線の敦賀延伸開業を記念して「北陸新幹線と遺跡」と題し、７月 12 日（金）から９月 16 日（月・祝）まで開催しました。

小松市に今も息づく“ものづくりの精神”の原点をさぐるべく、現在の小松駅周辺に広がっていた八日市地方遺跡を取り上げました。展示では、玉づくりのワザを示す玉類、土器や石器・鉄器などの生活の道具に焦点をあて、この遺跡からわかってきた弥生時代の最先端技術を紹介しました（写真①）。さらに、狩猟・採集の痕跡から見えてくる当時の食生活もあわせて紹介しました（写真②）。

写真①

写真②

第２回は、「輪島の古代遺跡と文化財」と題して、11 月 27 日（水）から令和７年３月 10 日（月）まで開催しました。

古代の律令国家では、都と地方を結ぶ道路がつくられ、それらを管理するための駅が置かれました。現在の輪島市には、三つの駅が大同（だいどう）３年（808）の廃止まで置かれており、市域に所在する遺跡からその跡地が推定されています。展示では、周辺に古代の駅が推定される輪島市三井小泉遺跡、鳳至町畠田遺跡、時国古屋敷遺跡を紹介しました（写真③）。また、令和６年能登半島地震で被災した文化財のレスキューの成果をパネルや映像で紹介し、あわせて当センターで救出後、保管している石川県指定史跡「中段（ちゅうだ）の板碑（いたび）」も展示しました（写真④・⑤）。

写真③

写真④

写真⑤

R６情報発信

令和６年度まいぶん考古学講座

まいぶん考古学講座は、職員が考古学や埋蔵文化財に関する話題や、それぞれの研究分野における最新情報、担当した発掘調査の成果などを、わかりやすく解説する公開講座です。令和６年度は９～11 月に３講座を開催しました。講義後に県内出土の関連遺物のミニ展示・解説をおこなうこともあります。

○「考古学で探る“度量衡”のはじまり」　度量衡とは、計量制度のことです。「大宝律令（701 年）」に成立したとされていますが、弥生時代中期以降、計量制度の存在を示す遺物が各地で出土しています。天秤や棹秤とともに使用される権（＝おもり）や、コンパスの痕跡がある木製品などを展示し、解説しました。

○「蛇行剣の謎」　蛇行剣とは曲がりくねった形の剣で、近年、奈良市富雄丸山古墳で発掘されたことが話題になりました。国内で 100 本程度しか見つかっていませんが、石川県では３本も見つかっています。この謎の多い蛇行剣から北陸の古墳時代の姿を解説しました。

○「能登と塩～土器を使った塩作り～」　土器を使って塩を作っていた古墳時代や奈良・平安時代から現代の揚浜塩田に至るまで、能登の製塩の歴史について解説しました。各時期の製塩土器を展示し、時期によって製塩土器の形や作り方が変化する様子を紹介しました。

この講座は、少しでもわかりやすい内容となるよう、解説する各職員がいろいろな工夫を凝らしながら準備を進めています。受講料無料、事前申し込み不要の公開講座ですので、お気軽に参加ください。

開催月日	題　目	講　師
９月８日（日）	「考古学で探る“度量衡”のはじまり」	特定事業調査グループ 林　大智
10月27日（日）	「蛇行剣の謎」	調査部参事 伊藤　雅文
11月10日（日）	「能登と塩～土器を使った塩作り～」	特定事業調査グループ 歌代　若菜

令和６年度の講座

講座風景

ミニ展示の解説風景

ミニ展示の解説風景

まいぶん日誌

令和６年（2024）　令和７年（2025）
11月 ～ 2月

11月

講座「弥生の玉づくり」

小学校の施設見学

ホール展「輪島の古代遺跡と文化財」

出前考古学教室

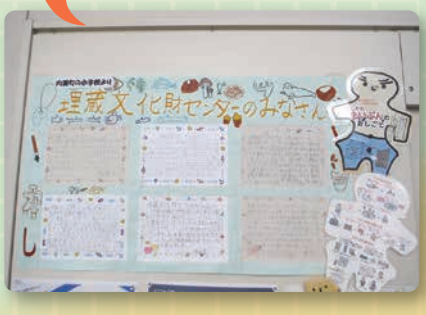
12月

講座「鳥形はにわづくり」

冬の古代体験広場

1月

小学校施設見学の感想文



あけまして おめでとうございます

古代体験「まが玉づくり＆貫頭衣を着てみよう」

古代体験「真冬のはにわづくり」

2月

講座「剣づくり」